

小学校における都市型連携システムとマネジメント

A Study on Management for a Children's Attitude, Behavior and Physical strength improvement in an Elementary school

前田 佳奈¹⁾ 畑 攻²⁾ 池田 延行³⁾ 小野里 真弓⁴⁾
Kana MAEDA, Osamu HATA, Nobuyuki IKEDA and Mayumi ONOZATO

Abstract

Today in Japan, Children's physical strength decline is a serious problem. To solve the problem, a various projects were carried out by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology and Board of education etc. Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology started the "Physical strength Improvement Project for Children" in 2004. And this year is a final year of the project. The purpose of this study was to consider the basic management method for children's sport.

A physical fitness test and two kinds of questionnaire surveys were conducted at elementary school which is a designated school for "Physical strength Improvement Project". Adequate statistical procedure such as fish-bone analysis, cross analysis, CHI-test was applied. The following management points were obtained:

1. Improvement of physical strength was shown by physical fitness test. And also habits were changed, and children's wishes to do more sport were shown by questionnaire surveys.
2. Relationship between physical strength, habit, and behavior were clarified by analyzing plural data simultaneously. Which means the effectiveness and necessity to use plural data were shown.
3. These data suggest that effective approach for children's sports based on 4 viewpoints of sport management. For example, understanding and cooperation of a parent for child sports are necessary.

keywords : Children, Physical strength, Management

I. 研究の目的

近年、子どものスポーツ活動に関連して、運動不足による体力低下やスポーツ活動の二極化などの問題が多く報じられている。特に、体力低下の問題は文部科学省による「体力・運動能力調査」¹⁸⁾¹⁹⁾が毎年発表され、昭和60年以降、低下傾向が続いていることが大きな社会問題となっている。子どものスポーツ活動においては、学校外の学習活動やテレビゲームなどの室内遊び時間の増加による、外遊びやスポーツ活動時間の減少、空き地や生活道路といった子ども達の手軽な遊び場の減少、少子化による仲間の減少といったいわゆる三間(時間・空間・仲間)の不足が指摘されている。

このような子どもの体力低下問題に対し、中央教育審議会答申(2002)¹⁷⁾では「子どもの体力向上のための

総合的な方策について」を取りまとめ、「体力向上に向けたキャンペーン」など6つの方策を提案している。

さらに、平成16年度からは、全国にモデル地域を指定し、子どもの体力の現状や生活実態を調査、分析し、地域の実情に応じた実践活動を行う「子どもの体力向上実践事業」を3ヵ年計画で開始しており、各方面で取組みが進められている。

本研究は、そのような文部科学省研究指定校(東京都)での3ヵ年計画の取組みを連携・支援する立場からのものであるが、取組みのテーマは「体づくりは人づくり、学校づくり」であり、学校と子どもの諸活動を中心にして、家庭や地域などの関係諸機関のサポート・連携による「都市型連携システム」が構想されている。この取組みは、子どもの体力向上を中心に運動意欲の向上、運動習慣の形成、生活習慣の改善及び保護者の理解・協力を有機的に図ろうとするものであり、また、体育大学を含む様々な連携による効果的なシステム構築も重要なテーマとなっている。

そのような背景から、いくつかの主要な先行研究を

1) 日本女子体育大学(教務補助員)
2) 日本女子体育大学(教授)
3) 国士舘大学(教授)
4) 日本女子体育大学(助手)

取り上げることができる。畑 (2005)²⁾は、運動行動論 (1976)²⁰⁾の視点から運動意欲、スポーツへの興味・関心などの主体的条件、運動の質や量、運動・スポーツの広がり・深まりの可能性からのスポーツの内容、さらに物的環境 (環境)・人的環境 (仲間)・社会環境 (時間など)などの要因を整理し、子どものスポーツ活動に求められるトータルな対応の必要性を提言している。

また、日本スポーツ産業学会プロジェクト (1998)²³⁾の「地域におけるマルチスポーツクラブに関する研究」では、マルチスポーツを「生涯にわたるスポーツ享受の実現のために、人とスポーツの関わりの多様性に着目し、その多様化への対応を志向するスポーツの捉え方である。スポーツ享受の多様性は、競技や種目の多様化のみならず、参加者の競技水準 (享受能力) やライフステージ、スポーツ観、参加の仕方などの多様な視点から理解されるもの」と定義づけている。そのような定義から、福本 (2000)²⁾は地域住民を対象にマルチスポーツの概念を具体化し、久野 (2006)⁸⁾は、中学・高校生の運動部活動の成果をマルチスポーツの視点から明確にしている。前田 (2006)¹⁴⁾は、子どものスポー

ツ活動の実態を、マルチスポーツと子どもを取り巻く環境 (学校・家庭・社会) の関係から分析し、子どものスポーツ活動の「する」「みる」などのスポーツの広がり、「競技水準」「参加の仕方」などのスポーツの深まり状況を明らかにしており、今日の子どものスポーツ研究においても重要な基本概念となろう。

さらに、これまでの先行研究は意識調査で得られたデータを基に研究を進める手法が主流であったが、体力データ等の客観データをも含めた総合的な分析と考察が必要であることも指摘される。

そこで本研究は、基本的なスポーツ行動の要因、マルチスポーツの状況および体力等の客観データを含めた総合的・複合的な視点から、対象校の取組みを中心に分析し、子どもスポーツに求められるマネジメントの在り方について基本的に考察・検討することを目的とする。

II. 研究の方法

1. 基本的なアプローチ

スポーツマネジメントの分野では、スポーツ組織や

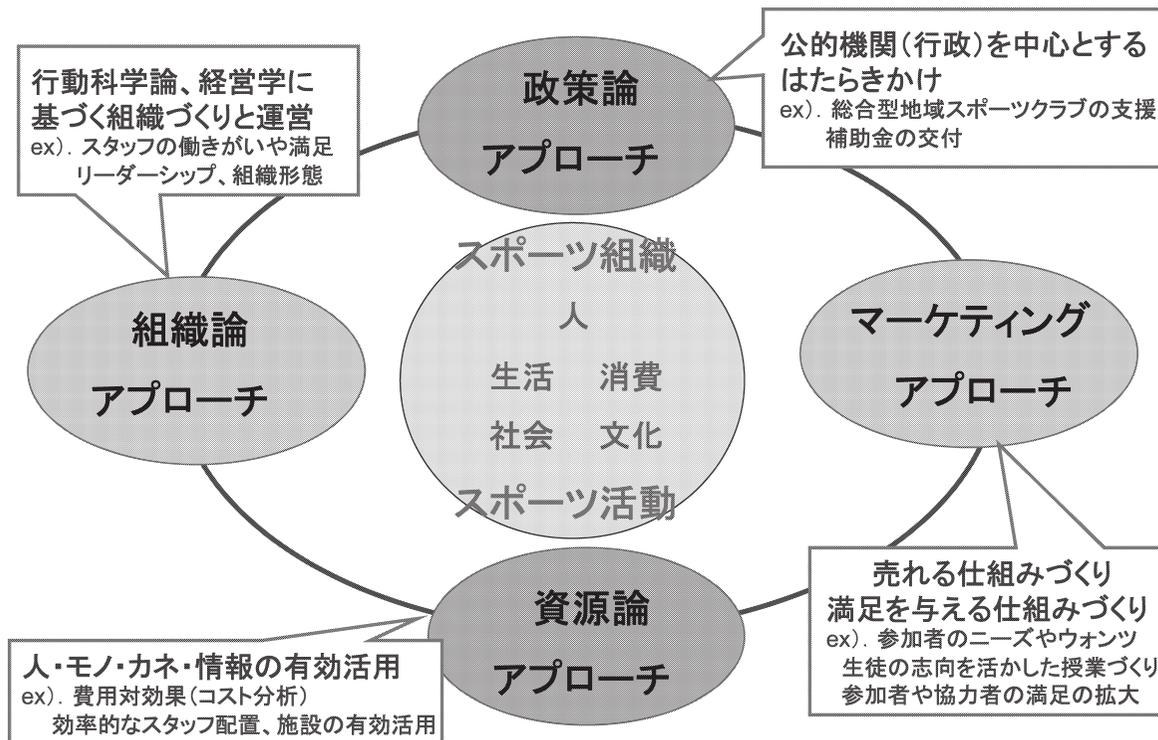


図1 スポーツマネジメントの主要な研究内容与方法

スポーツ活動、スポーツに関わる人々などスポーツに対して4つの視点からの研究的アプローチが主流である(図1)。この複合的な視点は、子どもの体力やスポーツ行動などを中心的な問題に位置づけて、その中心となる問題に対する基本的な4つのアプローチを示している。

マネジメントの4つのアプローチとは、公的機関(行政)を中心とするはたらきかけとしての政策論アプローチ、人・モノ・カネ・情報の有効活用による資源論アプローチ、行動科学論、経営学に基づく組織づくりと運営などの組織論アプローチ、そして売れる仕組みづくり、満足を与える仕組みづくりとしてのマーケティングアプローチである。このように4つの視点から子どもスポーツを総合的に分析・考察し、対象校の取組みの段階を踏まえて、必要となるマネジメントを検討した。

2. 調査項目の設定

本研究で行われた調査は、新体力テストと2種類のアンケート調査である。調査内容は生活実態調査(調査A)とスポーツ活動調査(調査B-1, B-2)の2種類を実施した。

生活実態調査は、文部科学省が「子どもの体力向上実践事業」の全国指定校で実施したものであり、体力の向上に直接的・間接的に関連する4つの要因から設定されている。具体的には食事や睡眠からなる生活習慣8項目、活動時間や運動機会からなる運動習慣6項目、内発的意欲や運動欲求からなる意欲6項目、保護者の支援や保護者の考えからなる保護者7項目から設定されている。

スポーツ活動調査は先行研究で実績のあるマルチスポーツに関する13項目、保護者の子どもとの関わり方に関する15項目を中心にスポーツ活動状況、スポーツ環境の項目から設定した。

3. 調査の実施および分析方法

本研究の対象校は、研究モデル校として実績のある小学校である。対象校は、東京都区内の閑静な住宅街に所在する全校生徒257名・10クラスと小規模な学校ではあるが、「子どもの体力向上実践事業」の他に区教育委員会の「心と体の健康教育」の研究指定校でもあり、先進的な取組みを展開している教育モデル校である。本研究は、3ヵ年計画中の2年目のデータを用いて考察した。

表1は、調査対象および調査実施期間を示している。調査Aは、最新の文部科学省の方法による「生活習慣」、「運動習慣」、「意欲」、「保護者」の4つの要因を数値化したフィッシュボーン分析を実施した。フィッシュボーン分析とは、現在の「子どもの体力向上実践事業」の対象校で実施した調査を分析したものであり、各校の取組みを多角的・構造的に分析し、取り組みの的確な診断を可能にする目的で新たに開発されたものである。具体的に、体力の向上に直接的・間接的に関連する要因を数値化したものであり、平成16年度の全国平均値を50とした偏差値を平成16・17年度とそれぞれ算出・比較し、平成16年度から平成17年度における数値の変動を分析したものである。

調査Bで収集されたデータは、マルチスポーツ項目、保護者の関わり方の項目を中心にクロス分析を行い、必要に応じて χ^2 検定を用いた。

表1 調査対象および期間

	対象者	期間
新体力テスト	全校生徒	1回目 2004年6月 2回目 2005年6月
調査A	全校生徒	1回目 2004年10月中旬 2回目 2005年9月中旬
調査B-1	5・6年児童 101名	2005年10月中旬～11月上旬 回収93名 (92.1%)
調査B-2	全児童の保護者 257名	2005年10月中旬～11月上旬 回収207名 (80.5%)

III. 結 果

1. 対象者の実態

(1) 対象者のスポーツ特性

表2は、スポーツ活動調査(調査B-2)で得られた対象者のスポーツ特性を性別で比較した結果を示したものである。

男女共に運動・スポーツ好きな子が多いが、体力については女子の方があまり自信のない子が多い結果を示した。スポーツ・運動活動に関しては、男子は女子と比較してスポーツ活動に積極的であり、女子は体育授業以外で運動をしていない子が31.4%と高い値であった。

(2) 新体力テスト結果

新体力テストの見方に関しては、年度を単純比較する方法と、子どもの成長に合わせた学年団による縦断

表2 子どものスポーツ特性

子どもの特性	男児 N=102		女児 N=105		全体 N=212		χ^2 検定
	n	%	n	%	n	%	
運動・スポーツの好き嫌い							
好き	68	66.7	58	55.2	129	60.8	$\chi^2=5.58264$ DF= 3
どちらかと言えば好き	22	21.6	36	34.3	60	28.3	
どちらかと言えば嫌い	12	11.8	9	8.6	21	9.9	
嫌い	0	0.0	1	1.0	1	0.5	n.s.
不明	0	0.0	1	1.0	1	0.5	
運動・スポーツの得意不得意							
得意	37	36.3	28	26.7	68	32.1	$\chi^2=6.93692$ DF= 3
どちらかと言えば得意	42	41.2	41	39.0	85	40.1	
どちらかと言えば不得意	18	17.6	33	31.4	51	24.1	
不得意	5	4.9	2	1.9	7	3.3	n.s.
不明	0	0.0	1	1.0	1	0.5	
体力の自信							
ある	39	38.2	22	21.0	64	30.2	$\chi^2=11.3064$ DF= 3
どちらかと言えばある	44	43.1	49	46.7	95	44.8	
どちらかと言えない	14	13.7	30	28.6	44	20.8	
ない	5	4.9	3	2.9	8	3.8	P<0.05
不明	0	0.0	1	1.0	1	0.5	
スポーツ・運動生活							
ほとんど行っていない	16	15.7	33	31.4	49	23.1	P<0.01
学校の運動系クラブに所属	17	16.7	15	14.3	35	16.5	P<0.05
学外のクラブ・チームに所属	42	41.2	17	16.2	60	28.3	P<0.001
学外の教室やレッスンに参加	45	44.1	40	38.1	88	41.5	n.s.
家族でスポーツをする	49	48.0	14	13.3	64	30.2	P<0.001
個人的に運動している	44	43.1	25	23.8	71	33.5	P<0.01
よくスポーツをみる	42	41.2	11	10.5	55	25.9	P<0.001
その他	4	3.9	6	5.7	10	4.7	

的な比較の2通りの方法がある。年度比較は行政機関がマクロな視点から使用する手法であり、全体の傾向をみるのに有用である。学年団による縦断的な比較は、実際に目の前にいる子ども達の体力の動向を把握するのに有用である。

表3は、年度比較により、対象校の平成16年度および17年度の新体力テストの結果を平成16年度の全国平均と比較したものであり、太字は対象校が上回った項目を、網掛けは対象校が有意に上回った項目を示している。

全体的に、平成16年度よりも平成17年度の方が全国平均を上回る傾向にある。体力の総合的な傾向を示す得点合計は、男子が全国平均を上回る傾向にあり、女子は3年生と6年生を除いては全国平均を上回っていない。

ない。特に2年生女子と4年生女子はほとんどのテスト項目が低い結果を示している。また、全国平均を有意に上回ったのは男女とも6年生のみであった。次に、種目別の結果では、握力と20mシャトルランの数値が全体的に低く、反復横とびや立ち幅跳びが高い傾向であった。これらの結果から、児童の特性や種目特性による違いが明らかであった。

表4は、学年団による比較であり、平成16年度の全国平均値を50としたTスコアを学年ごとに算出し、平成16年度から17年度にかけての伸びを学年ごとにみたもの（縦断的な比較）である。太字はスコアが50を超えたものを、網掛けは前年よりも高い項目を示している。

全体的に前年よりもスコアは伸びており、体づくり

表3 対象校の新体力テスト結果 一年度比較一

	1年生		2年生		3年生		4年生		5年生		6年生		
	男子	女子											
握力 (kg)	H16	6.90±1.37	6.46±1.06	11.83±2.96	10.36±1.86	12.35±2.01	11.25±2.86	13.35±2.95	11.67±3.00	18.95±4.24	17.88±3.06	20.58±3.02	18.38±3.80
	H17	9.64±2.21	8.09±1.78	9.31±1.76	7.96±1.87	12.11±3.34	10.5±1.80	14.05±2.52	12.78±3.62	16.10±3.65	15.60±3.43	22.12±5.05	19.69±4.55
全国	9.59±2.56	8.77±2.28	11.23±2.77	10.44±2.64	13.14±2.82	12.26±2.70	15.04±3.24	14.07±3.06	17.46±3.82	16.96±3.79	20.31±4.45	19.57±4.20	
上体起こし (回)	H16	8.80±7.22	6.65±5.87	14.41±4.75	12.00±3.64	13.70±4.22	12.95±6.64	17.17±4.39	14.37±6.95	22.27±4.65	19.56±4.29	23.85±5.97	18.71±5.72
	H17	10.86±5.03	8.86±6.64	13.81±4.25	10.24±5.31	15.95±5.94	16.42±3.66	17.75±3.77	16.26±4.00	19.57±4.13	17.30±4.15	24.88±3.25	23.00±3.44
全国	10.53±5.21	10.38±4.89	12.92±5.56	12.48±5.17	15.14±5.60	14.17±5.13	17.05±5.55	15.68±5.24	19.36±6.01	17.53±5.42	21.00±5.33	18.29±4.97	
長座体前屈 (cm)	H16	23.90±5.78	28.71±4.49	28.91±7.08	32.07±4.87	25.35±4.98	28.05±7.28	26.29±6.28	31.20±7.35	34.57±5.57	38.53±8.04	38.80±7.38	37.57±10.80
	H17	25.95±5.52	26.82±4.25	22.00±4.54	26.68±4.91	30.00±8.64	31.75±6.58	28.00±4.95	32.35±7.73	32.20±7.64	37.27±7.20	45.20±8.34	47.19±8.23
全国	25.59±6.78	27.24±6.35	27.18±7.07	29.63±7.01	29.25±7.18	31.63±7.08	31.00±7.00	33.90±7.02	33.21±8.81	36.56±8.68	35.06±8.05	38.66±8.21	
反復横跳び (点)	H16	4.80±1.23	4.08±1.32	31.50±5.54	29.14±3.42	31.95±4.43	31.30±4.13	35.55±5.16	32.72±4.50	44.09±6.93	44.80±4.49	46.05±6.56	37.23±10.89
	H17	29.95±4.69	28.36±4.23	30.75±3.03	28.24±6.22	35.89±9.90	38.25±3.27	39.40±4.67	35.65±7.94	45.32±5.96	40.43±6.14	50.08±4.86	45.69±4.33
全国	26.04±4.83	25.63±4.07	30.00±5.48	28.85±4.93	34.37±6.57	32.33±5.98	38.01±6.97	35.84±6.31	41.70±6.99	39.42±6.34	44.86±6.61	41.21±6.13	
20m シャトルラン (回)	H16	15.40±7.00	11.71±4.67	29.27±13.25	16.00±5.64	30.70±15.70	21.76±9.57	35.39±17.76	22.67±10.99	44.24±13.74	36.80±14.73	47.10±22.03	41.93±17.07
	H17	12.32±3.87	9.77±3.75	17.06±8.24	9.68±3.32	29.21±17.07	22.00±9.17	38.60±16.43	25.78±9.86	47.10±20.10	33.63±13.16	66.46±18.40	51.38±15.91
全国	15.92±8.19	13.54±5.66	24.18±12.25	19.70±8.43	33.27±15.75	26.45±12.22	42.06±18.19	33.42±13.90	49.38±20.05	39.23±15.53	59.30±21.40	45.15±16.74	
50m走 (秒)	H16	11.57±0.72	12.30±1.65	10.60±0.68	11.01±0.47	10.47±1.02	11.01±1.18	9.81±0.82	10.36±0.85	8.94±0.61	9.42±0.52	9.02±0.55	9.26±0.69
	H17	12.00±0.87	12.70±1.16	10.45±1.17	11.08±1.03	10.04±0.68	10.14±0.53	9.52±0.51	10.11±0.83	8.46±0.73	9.07±1.11	8.74±0.71	8.95±0.50
全国	11.60±1.01	11.90±0.98	10.76±0.92	11.01±0.85	10.15±0.82	10.44±0.80	9.69±0.90	9.98±0.78	9.33±0.78	9.54±0.71	8.89±0.78	9.22±0.68	
立ち幅跳び (cm)	H16	131.00±15.19	112.83±10.81	134.23±18.64	114.71±15.77	133.90±15.47	122.95±19.86	152.97±16.76	131.00±20.59	163.55±19.61	155.19±17.82	178.10±15.16	155.43±31.27
	H17	129.95±15.48	106.73±18.83	138.38±14.69	114.52±16.82	146.39±18.72	135.83±14.22	155.35±14.03	136.30±21.31	163.45±16.37	144.37±22.27	182.24±19.38	169.75±16.04
全国	113.54±16.94	104.47±15.77	125.83±18.35	116.37±16.97	138.61±18.07	128.14±18.09	146.24±18.83	137.57±18.77	155.52±19.60	146.26±19.71	167.24±21.49	154.82±19.90	
ソフトボール 投げ (m)	H16	9.20±3.58	6.23±1.38	14.78±5.93	7.57±3.32	17.65±5.86	9.43±3.19	20.84±7.31	8.61±1.93	24.86±8.13	15.25±5.90	29.15±10.14	18.14±6.04
	H17	9.50±3.83	5.27±2.49	13.06±3.34	7.32±2.43	19.68±7.91	9.67±5.72	23.10±7.76	12.78±5.70	25.10±8.13	12.27±3.52	30.32±8.70	18.63±8.10
全国	9.37±3.31	5.85±1.96	12.89±4.61	7.81±2.57	17.42±5.97	9.85±3.00	21.65±7.04	12.43±3.80	25.62±7.80	15.04±4.93	30.19±9.09	17.15±5.67	
得点合計 (点)	H16	26.00±6.09	24.90±5.19	39.86±7.71	35.85±5.90	40.15±5.65	39.16±10.61	45.90±7.27	42.30±8.26	60.00±7.71	59.64±8.15	62.53±8.85	58.00±13.06
	H17	31.27±7.21	26.64±7.96	35.27±5.56	31.83±4.82	46.22±9.05	45.42±4.89	49.75±6.53	47.17±10.03	57.70±7.58	54.80±9.75	68.00±8.37	67.79±6.15
全国	29.67±5.99	29.14±5.92	36.53±6.61	36.56±6.50	43.67±7.07	43.06±7.12	49.11±7.95	49.01±49.01	55.10±8.37	55.40±8.03	61.03±8.54	60.14±7.98	

* 太字は対象校が全国平均値を上回った項目を示している

* アミかけは対象校が全国平均を有意に上回った項目を示している

表4 体カテスト (Tスコア) の伸び -学年団 (縦断的) 比較-

		2年生		3年生		4年生		5年生		6年生	
		男子	女子								
握力 (kg)	H16	39.49	39.87	52.17	49.70	47.20	46.26	44.78	42.16	53.90	52.43
	H17	43.07	40.61	46.35	43.48	46.94	45.78	46.44	46.41	54.07	50.29
上体起こし (回)	H16	46.68	42.37	52.68	49.07	47.43	47.62	50.22	47.50	54.84	53.75
	H17	51.60	45.67	51.45	54.39	51.26	51.11	50.35	49.58	57.28	59.48
長座体前屈 (cm)	H16	47.51	52.31	52.45	53.48	44.57	44.94	43.27	46.15	51.54	52.27
	H17	42.67	45.79	51.04	50.17	45.71	47.79	48.85	50.82	62.60	60.39
反復横跳び (点)	H16	—	—	52.74	50.59	46.32	48.28	46.47	45.06	53.42	58.49
	H17	51.37	48.76	52.31	59.90	51.99	49.70	55.18	51.59	57.90	57.31
20m シャトルラン	H16	49.37	46.77	54.16	45.61	48.37	46.16	46.33	42.27	47.44	48.44
	H17	44.19	38.11	47.42	46.36	48.10	44.50	48.89	46.39	53.35	53.72
50m 走 (秒)	H16	50.30	45.92	51.74	50.00	46.10	42.88	48.67	44.49	55.00	51.69
	H17	53.37	49.18	51.34	53.75	51.89	47.69	61.15	56.62	51.92	53.97
立ち幅跳び (cm)	H16	60.31	55.30	54.58	49.02	47.39	47.13	53.57	46.50	54.10	54.53
	H17	56.84	48.91	54.31	54.25	54.84	49.32	54.05	49.04	56.98	57.50
ソフトボール 投げ	H16	49.49	51.94	54.10	49.07	50.39	48.60	48.85	39.95	49.03	50.43
	H17	50.37	48.09	53.79	49.40	52.06	50.92	49.33	44.38	50.14	52.61
得点合計 (点)	H16	43.87	42.84	55.04	48.91	45.02	44.52	45.96	48.63	55.85	55.28
	H17	48.09	42.72	53.61	53.31	50.81	49.62	53.11	49.25	58.16	59.59

* 太字は対象校の T スコアが50を上回った項目を示している
 * アミかけは前年度のスコアを上回った項目を示している
 * 2年生反復横跳びの T スコアは欠損値

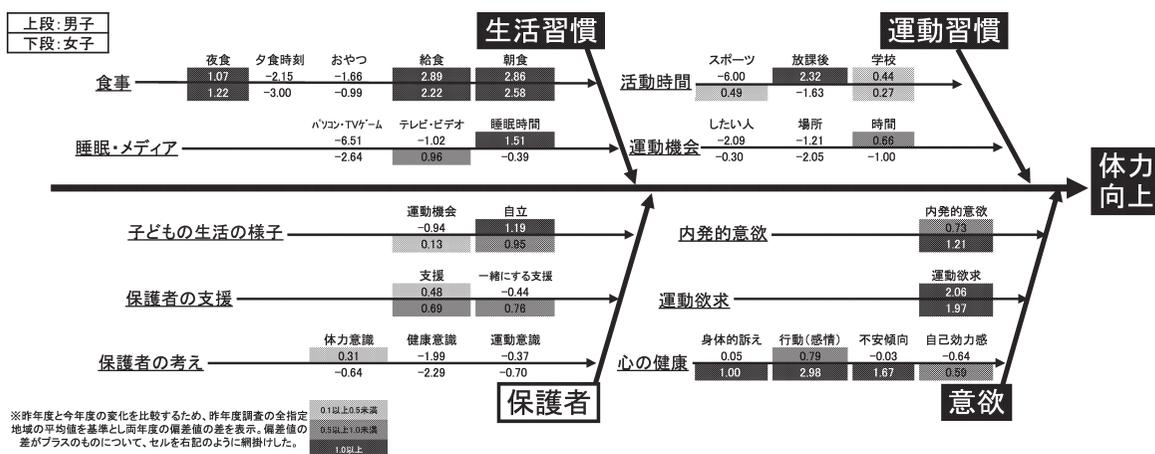


図2 フィッシュボーン分析 (性別)

という対象校の第一目標は達成されていると言える。しかしながら体力は一年間で飛躍的に向上するものではなく、今後も継続的な取組みと成果の追跡が必要である。

(3) フィッシュボーン分析結果

ここでは、体力の向上に関連する要因を診断的に分析・考察するためにフィッシュボーン分析を用いた。図2は、フィッシュボーン分析の結果を性別に示している。網掛けは平成16年度より改善された項目を示し、上段が男子、下段が女子の結果である。男子は意欲や運動習慣、生活習慣の項目で低下がみられ、早急な改善が必要である。一方、女子は意欲の部分で特に向上がみられた。しかし、運動習慣や保護者に関してはあまり改善がみられず、今後は意欲が運動習慣に結びつくように働きかけることや保護者の協力が必要であることを示している。

2. 取組み事例

対象校では『体づくりは、人づくり、学校づくり』をコンセプトに各方面からのサポート・連携が特徴となる、都市型連携システムを作り、取り組んでいる。その取組みの成果として体力向上、健康増進などの体づくり、心理面の成長や、人の充実などの人づくり、諸機関の連携システムが、確立することで地域とつながった開かれた学校づくりが期待される。

一般的に都市部にはスポーツをする空間・自然がないと言われているが、本取組みでは、その空間を新たに作るのではなく、都市部にしかできない連携システムをつくるのが特徴的である。そのひとつとして近隣の体育大学との連携が挙げられ、またプロスポーツチームとの連携や最先端のスポーツ施設の利用等が計画されている。

平成17年度に行われた具体的な実践内容の一例として、体育大のサポートを受け、運動会前の陸上部の選手による短距離走のレッスンや、夏休み期間中の水泳指導（補助スタッフとして地域の方々も参加）などが行われた。また、家族の意識の改善と、家庭と学校の連携を強めるために、趣旨をより理解してもらうための講演会が、心・栄養・体づくりの3回にわたって開催され、次年度に向けて、さらに活発に各プログラムが展開されようとしている。

3. スポーツ環境

ここでは、スポーツ活動の直接の資源となる基本的なスポーツ環境について検討する。表5は、子どものスポーツ環境について子ども（5・6年生）自身の認知度とその保護者の認知度を比較したものである。

全ての項目において、子どもの方が高い割合を示しており、各項目で有意差が認められた。中でも「一緒にスポーツを楽しむ仲間がいる」「スポーツを楽しむ時間がある」「手軽にスポーツができる場所がある」のいわゆる三間で特に大きな差がみられた。すなわち、保護者が思っているよりも子ども達は環境に恵まれていると認識していることを示している。このことから、環境の認知には意識的な問題が関与しており、ただ単に環境を与えたり、整備をしただけではなく、運動との関わりの豊かさが重要であることを示している。一方で、「学校の先生以外で身近にスポーツを指導してくれる人がいる」「スポーツをする時に送迎やチームのお手伝いなど面倒をみてくれる人がいる」の項目に関しては、両者とも低い結果を示しており、指導者・世話人不足の解決が急務であることを示している。

表5 子どもと保護者のスポーツ環境認知

	子ども		保護者		有意差		
	N=93		N=76		χ^2 検定		
	n	%	n	%	χ^2	DF	P
1 手軽にスポーツができる場所がある	70	75.3	45	59.2	7.44118	1	**
2 一緒にスポーツを楽しむ仲間がいる	81	87.1	51	67.1	12.6092	1	***
3 身近にスポーツを指導してくれる人がいる	38	40.9	25	32.9	3.77867	1	*
4 スポーツを楽しむ時間がある	63	67.7	20	26.3	31.1395	1	***
5 スポーツをする時に面倒をみてくれる人がいる	30	32.3	17	22.4	5.23481	1	*

複数回答 *** P<0.001, ** P<0.01, * P<0.05

4. 保護者

(1) 保護者の運動歴が子どもに与える影響

表6は、保護者の運動歴と子どものスポーツ活動状況の関係を示したものである。中学・高校時代に運動部に所属していた保護者（元運動部）の子どもと、運動部に所属していなかった保護者（非運動部）の子ど

もで比較した結果、「学外のスポーツ教室やレッスンに参加している」以外の項目において有意差が認められた。特に「体育の授業以外ではあまり運動をしていない」子どもの保護者は非運動部であり（5%水準）、「自由時間に個人的に運動している」子どもの保護者は元運動部である（1%水準）という有意な関係がみられ

表6 保護者の運動歴別にみた子どものスポーツ活動状況

	元運動部		非運動部		有意差		
	N=151		N=61		χ^2 検定		
	n	%	n	%	χ^2	DF	P
1 体育の授業以外ではあまり運動をしていない	32	21.2	18	29.5	3.82504	1	*
2 学校の運動系クラブに参加している	26	17.2	9	14.8	4.8743	1	*
3 学校外のクラブやチームに参加している	47	31.1	13	21.3	5.78904	1	*
4 学校外でスポーツ教室やレッスンに参加してる	63	41.7	25	41.0	2.40161	1	n.s.
5 家族でキャッチボールなど簡単なスポーツをする	49	32.5	15	24.6	4.63127	1	*
6 自由時間に個人的に運動している	59	39.1	12	19.7	11.1459	1	**
7 よくスポーツをみる	45	29.8	10	16.4	8.48566	1	**
8 その他	7	4.6	3	4.9			

複数回答 ** P<0.01, * P<0.05

表7 保護者の関わり方

保護者 (N=212)	現在		今後		χ^2 検定		
	n	%	n	%	χ^2	DF	P
1 複数のスポーツを子どもと楽しむ	35	16.5	92	43.4	37.6462	1	***
2 子どもと学校でのことについてよく話す	180	84.9	123	58.0	38.7305	1	***
3 子どもの運動会などスポーツイベントの応援によく行く	156	73.6	105	49.5	26.9192	1	***
4 子どもとスポーツのことについてよく話をする	97	45.8	83	39.2	2.85756	1	n.s.
5 子どもの食事に気をつけている	167	78.8	127	59.9	18.8592	1	***
6 子どもに運動・スポーツの指導をする	49	23.1	54	25.5	1.603	1	n.s.
7 子どもに規則正しい生活をさせている	163	76.9	142	67.0	6.31999	1	*
8 社会の出来事や事件などを子どもとよく話す	135	63.7	117	55.2	4.14766	1	*
9 シーズンに合わせて子どもとスポーツを楽しむ	53	25.0	79	37.3	8.53632	1	**
10 子どもの勉強や宿題の面倒をよくみる	111	52.4	96	45.3	3.06774	1	n.s.
11 子どもと友達とのことについてよく話す	161	75.9	121	57.1	18.0002	1	***
12 子どものスポーツに関して相談できる人がいる	61	28.8	58	27.4	1.27337	1	n.s.
13 子どもと将来の夢などについてよく話し合う	96	45.3	107	50.5	2.08867	1	n.s.
14 私は学校の活動によく協力する	93	43.9	90	42.5	1.04791	1	n.s.
15 私は地域でのボランティアなどの活動によく参加する	26	12.3	57	26.9	15.8946	1	***

複数回答 *** P<0.001, ** P<0.01, * P<0.05

た。

このことから、元運動部の保護者の子どもは、非運動部の保護者の子どもに比べ、積極的に運動・スポーツを行っていることが明らかである。すなわち、保護者が運動部に所属をしていたなど、運動に深く関わっていたか否かが子どものスポーツ活動への参加に与える影響が強いことを示している。

(2) 保護者の関わり

表7は、保護者が子どもと現在どのように関わっており、また今後どのように関わっていきたいと考えているかを示している。

全体的に現在の方が高く、今後は減少傾向を示している。特に生活やしつけに関する項目が高く、保護者は、現在子どもに豊かに関わっていることを示している。一方では、「複数のスポーツを子どもと楽しむ」、「シーズンに合わせて子どもとスポーツを楽しむ」のようなスポーツに関する項目は「現在」ではあまり多くみられないが、「今後は積極的に関わろうとする有意な関係がみられた。つまり、保護者も今後は子どもと一緒にスポーツを楽しもうという意欲が高いことを示している。

(3) 体力と保護者の関わり

表8および表9は、現在および今後の保護者の関わり方を、体力の向上があまりみられなかった2年生女子の保護者と2年生女子以外の保護者で比較したものである。結果4-(2)と同様に、全体的に現在よりも今後の方が減少傾向を示しているが、2年生女子は、特に現在のスポーツの項目に関して低い反応を示すとともに、「規則正しい生活」などのしつけに関する項目に高い反応を示している。また、スポーツ活動に関する項目は、全体的に現在よりも今後の方が高い結果となっているが、2年生女子は、2年生女子以外に比べて低い結果となっている。このことから、保護者の関わり方、特にスポーツに対する関わり方が体力の向上に影響を与えることが明らかである。つまり、子ども自身だけではなく、保護者の意識改善と行動改善が必要であることを示している。

5. マルチスポーツ分析

ここでは、児童の現在と今後のスポーツの広がりや深まりの状況を把握するために、マルチスポーツ分析を用いた。表10は、5・6年生の児童が現在どのよう

表8 2年生女子の保護者の関わり方（現在）

現 在	2年女子以外		2年女子		有意差		
	N=188		N=24		χ^2 検定		
	n	%	n	%	χ^2	DF	P
1 複数のスポーツを子どもと楽しむ	35	18.6	0	0.0	20.872	1	***
2 子どもと学校でのことについてよく話す	158	84.0	22	91.7	13.3435	1	***
3 子どもの運動会などスポーツイベントの応援によく行く	140	74.5	16	66.7	5.24504	1	*
4 子どもとスポーツのことについてよく話をする	92	48.9	5	20.8	12.2487	1	***
5 子どもの食事に気をつけている	150	79.8	17	70.8	5.66163	1	*
6 子どもに運動・スポーツの指導をする	47	25.0	2	8.3	13.838	1	***
7 子どもに規則正しい生活をさせている	139	73.9	24	100.0	20.8467	1	***
8 社会の出来事や事件などを子どもとよく話す	124	66.0	11	45.8	6.96386	1	**
9 シーズンに合わせて子どもとスポーツを楽しむ	50	26.6	3	12.5	11.4279	1	**
10 子どもの勉強や宿題の面倒をよくみる	99	52.7	12	50.0	4.7305	1	*
11 子どもと友達とのことについてよく話す	144	76.6	17	70.8	5.55037	1	*
12 子どものスポーツに関して相談できる人がいる	58	30.9	3	12.5	12.1694	1	***
13 子どもと将来の夢などについてよく話し合う	83	44.1	13	54.2	5.30773	1	*
14 私は学校の活動によく協力する	83	44.1	10	41.7	4.91923	1	*
15 私は地域でのボランティアなどの活動によく参加する	24	12.8	2	8.3	13.7105	1	***

複数回答 *** P<0.001, ** P<0.01, * P<0.05

表9 2年生女子の保護者の関わり方(今後)

今 後	2年女子以外		2年女子		有意差		
	N=188		N=24		χ^2 検定		
	n	%	n	%	χ^2	DF	P
1 複数のスポーツを子どもと楽しむ	84	44.7	8	33.3	6.36966	1	*
2 子どもと学校でのことについてよく話す	109	58.0	14	58.3	4.84178	1	*
3 子どもの運動会などスポーツイベントの応援によく行く	94	50.0	11	45.8	4.85898	1	*
4 子どもとスポーツのことについてよく話をする	78	41.5	5	20.8	10.1979	1	**
5 子どもの食事に気をつけている	115	61.2	12	50.0	5.28341	1	*
6 子どもに運動・スポーツの指導をする	49	26.1	5	20.8	7.54	1	**
7 子どもに規則正しい生活をさせている	126	67.0	16	66.7	5.27028	1	*
8 社会の出来事や事件などを子どもとよく話す	105	55.9	12	50.0	4.85442	1	*
9 シーズンに合わせて子どもとスポーツを楽しむ	72	38.3	7	29.2	6.55329	1	*
10 子どもの勉強や宿題の面倒をよくみる	88	46.8	8	33.3	6.69739	1	**
11 子どもと友達とのことについてよく話す	108	57.4	13	54.2	4.74149	1	*
12 子どものスポーツに関して相談できる人がいる	55	29.3	3	12.5	11.8705	1	***
13 子どもと将来の夢などについてよく話し合う	96	51.1	11	45.8	4.91666	1	*
14 私は学校の活動によく協力する	82	43.6	8	33.3	6.22095	1	*
15 私は地域でのボランティアなどの活動によく参加する	55	29.3	2	8.3	14.5206	1	***

複数回答 *** P<0.001, ** P<0.01, * P<0.05

表10 マルチスポーツ状況

5・6年生 (N=92)	現在		今後		χ^2 検定		
	n	%	n	%	χ^2	DF	P
1 運動部やクラブに入り選手としてスポーツをする	32	34.8	42	45.7	4.52088	1	*
2 たくさんの種類のスポーツを楽しむ	31	33.7	57	62.0	16.9015	1	***
3 季節に合わせてスポーツを楽しむ	24	26.1	48	52.2	15.4246	1	***
4 運動やスポーツをよくする	56	60.9	54	58.7	2.35086	1	n.s.
5 自分の気分や考えを生かしてスポーツを楽しむ	30	32.6	41	44.6	5.06843	1	*
6 家族や友達とスポーツの話をよくする	42	45.7	38	41.3	2.56538	1	n.s.
7 よくスポーツ観戦をする	32	34.8	40	43.5	3.74206	1	n.s.
8 スポーツ番組をよくみる	50	54.3	35	38.0	7.10636	1	**
9 自分の体力や能力にあわせてスポーツを楽しむ	43	46.7	49	53.3	2.95652	1	n.s.
10 いろいろなレベルの人とスポーツを楽しむ	42	45.7	49	53.3	3.23951	1	n.s.
11 忙しくても時間をみつけてスポーツを楽しむ	34	37.0	48	52.2	6.51172	1	*
12 手軽にスポーツを楽しむ	48	52.2	52	56.5	2.54095	1	n.s.
13 お友達にスポーツを教えることがある	30	32.6	39	42.4	4.1971	1	*

複数回答 *** P<0.001, ** P<0.01, * P<0.05

にスポーツと関わっており、また今後どのように関わっていききたいと考えているかを示している。

全体的に、現在よりも今後の方が高い結果を示しており、その中でも「たくさんの種類のスポーツを楽しむ」、「季節に合わせてスポーツを楽しむ」、「忙しくても時間をみつけてスポーツを楽しむ」「お友達にスポーツを教える」などの項目が有意に高い結果を示した。

この結果は、5・6年生児童の「複数のスポーツ」などのように、マルチスポーツの基本概念である子どもの運動・スポーツの広がりや深まりを示しており、対象校の子どものスポーツのマルチ化が明確に浸透していることを示している。今後はさらにそのような細やかなニーズに適合したプログラムの開発と展開が重要である。

IV. 考 察

子どもスポーツのマネジメント

スポーツマネジメントの分野では、政策論・資源論・組織論・マーケティングアプローチの4つの視点からスポーツを捉えるのが主流である(図1)。本研究においても、これらの4つの視点から本取組みおよび子どもスポーツに対して以下のように考察した。

(1) 子どもの状況分析による考察

結果1-(2)では、対象校の体力の状況は概ね良好であり、対象校の取組みが良い方向に向かっていることを示している。また、結果1-(3)および結果5では、運動に対する意識・意欲が高まっていることが明らかであり、スポーツの深まりと広がりを示すマルチスポーツの状況も明らかであった。対象校の多彩なプログラムおよび様々な連携による複合的な取組みが、取組み2年目の成果として良好な結果をもたらしているものと考えられる。

一方、現時点では、明確に体力全般の向上がみられてはいないことも事実であり、今後の大きな課題となるものである。最終目的となる体力の向上に関しては、本研究での分析による意欲の向上およびスポーツのマルチ化が、今後の明確な体力の向上につながるが予測されるが、取組みの継続とともに部分修正も必要である。今後は、学年および男女などによるスポーツの状況および成果が異なることから、子どもの特色に応じた、よりきめ細かな対応が必要であると考えられる。

(2) 政策論アプローチによる考察

子どもスポーツにおける政策論アプローチの視点で

は、文部科学省や教育委員会などの行政機関が中心となって、学校へのより効果的な支援および働きかけが必要である。結果2で述べたように、対象校は「子どもの体力向上実践事業」の実践校として公的機関からの支援を受け、取組みを進めている。その結果、考察1-(1)で述べたように、体力や意欲などで好ましい状況であり、取組みの成果として表れている。しかし、来年度からは補助金などが終了することから、次年度以降を見据えて、政策的な補助・支援がなくても取組みが継続できる自立したシステムをつくり上げることが重要である。

また、小学校の体育授業は体育を専門としない先生によって行われることが多いことも事実である。運動が得意ではない子どもに、できるようになる喜びを教えられないままに、運動嫌いを生じさせてしまう場合も少なくないようである。「できる・わかる授業」を目指すために、より専門性の高い学生である体育大生を活用し、本物を体験させたり、高い専門性ゆえにわかるコツを教えたりできる仕組みづくりが有効であると考えられる。そのような仕組みでは、教育現場での学生の活躍とともに、学生は教員から生徒との接し方を学び、大学の単位として認定されるなどの交換関係が成立し、自立した連携が可能となるものと考えられる。本取組み事例では、小学校と体育大学の連携が機能しはじめているが、平成17年度は単発的なものが多く、このような関係を今後はさらに多方面に展開し、システム化されたサポート体制へと充実させることが望まれる。そのようなシステムづくりのための政策的なサポートも重要である。

(3) 資源論アプローチによる考察

子どもスポーツにおける資源論からのアプローチでは、スポーツ活動を促す環境要因として時間・空間・仲間が重要と考えられている。結果3では、時間・空間・仲間よりも子どもスポーツの指導や世話をしてくれる人が不足していることが明らかになったことから、効率的な専門家の配置が必要である。また、単に物理的な資源だけではなく、運動やスポーツの充実により、それらの資源に対する認知が大幅に向上する結果から、扱われる運動の質および量が大きく問われるものと考えられる。その為には、先に述べたような体育授業時の体育大生の活用や、放課後の運動遊びプログラムの企画などのような効果的なプログラムとともに、本格的な学校インターンシップなどの新たなシステムの開発が望まれる。

(4) 組織論アプローチによる考察

組織論の視点からは、子どもスポーツが実践される学校・クラスや家庭を組織として捉えることができる。子どもスポーツの主役である子どもへの動機付けをするにあたって、学校長・教師・保護者がどのようなリーダーシップを発揮するのが重要となる。特に結果1-(3)の保護者の項目および結果4から、保護者の役割が重要であり、保護者をどのように位置づけていくかがポイントとなる。保護者がさらに学校や地域と一体となって取組めるように、連携を強化していくことが重要となる。また、連携システム全体を組織としてとらえ、そこに関わる人たちのインセンティブを重視した運営も重要である。子どもスポーツに関わる人々の全てが納得し、動機付けられるシステムづくりが必要となる。

(5) マーケティングアプローチによる考察

マーケティングアプローチでは、子どものニーズやウォンツが重要な視点となる。結果5のマルチスポーツ分析により、複数スポーツやシーズンスポーツなど、子どものスポーツとの関わり方が明らかであった。また、運動欲求などの意欲が高いこと（結果1-(3)）から、今後は体育授業を中心に、学校でのあらゆるスポーツの機会をとおして、マルチな対応や柔軟な対応が求められるものとする。また、地域のスポーツ教室および民間のレッスンなども、今日の重要な子どものスポーツの機会となっているが、いずれの場においても、マーケティング志向のサービス展開が重要となっているものとする。

V. 結 論

本研究では、子どもの体力向上実践事業の取組みおよび子どもスポーツで必要とされる基本的なマネジメントを考察するために、各種調査を実施した。得られたデータを分析し、マネジメントの基本視点である政策論、資源論、組織論、マーケティングの各視点から総合的に考察・検討した。結果は以下のように要約される。

- (1) 各種データの分析から、対象校の取組みの状況が明らかとなった。体力や生活習慣等の状況は概ね良好であり、スポーツに対する意欲が高い結果であった。
- (2) 体力データおよび生活習慣等の客観データとマルチスポーツ状況等の意識調査データなどの質と量に

関わるデータ分析によって、対象校のより詳細な実態が浮かびあがり、総合的にとらえる有効性と必要性が示された。

- (3) 4つのスポーツマネジメントアプローチから、今後の取組み及び子どもスポーツに対する有効な働きかけが示唆された。それらはサポート体制の確立、効率的な専門家の配置、保護者の位置づけ、子どものニーズに応じた授業・スポーツ教室の運営などであった。

なお、取組みの最終的な成果に対する追跡はもちろんのこと、さらに取組みの各部で、本研究で考察した、きめ細かなサービスづくりと展開が、今後は必要である。また、複合的な要因に起因する子どもの体力やスポーツ状況をさらに多角的に検討し、また、実践的な取組みに即した総合的な分析と考察がますます重要となるものとする。

参考文献

- 1) 江田昌佑監修 (1999)「スポーツライフ白書 する 観る 視る 読む 支える 話す」ぎょうせい
- 2) 福本恵美子 (2000)「マルチスポーツの実際と可能性に関する研究」日本女子体育大学大学院修士論文
- 3) 畑 攻, 小野里真弓, 齊藤隆志, 他 (2005)「スポーツマネジメントと子どもスポーツネットの企画・運用」日本体育学会第56回大会予稿集 p.290
- 4) 畑 攻, 宇土正彦, 八代 勉 (1984)「運動・スポーツ行動に対する運動者の主体的条件の類型化に関する研究」筑波大学体育科学系紀要 p.11-19
- 5) 林 邦雄 (2005)「図解子ども事典<普及版>」一藝社
- 6) 林 園子, 畑 攻, 小野里真弓, 他 (2005)「都会における子どもの体力・運動能力向上の取り組みとスポーツスタイル」日本体育学会 第56回大会予稿集 p.291
- 7) 林 園子, 畑 攻, 小野里真弓, 他 (2006)「都内小学校と女子体育大の連携とマネジメント」日本体育学会第57回大会予稿集 p.154
- 8) 久野 歩 (2006)「学校運動部活動の在り方に関する一考察—マルチスポーツの概念からのアプローチ—」東京学芸大学大学院修士論文
- 9) 前田佳奈, 畑 攻, 池田延行, 他 (2004)「中学生・高校生の諸特性とマルチスポーツ」日本体育学会 第55回大会号 p.377
- 10) 前田佳奈, 畑 攻, 小野里真弓, 他 (2005)「子どものスポーツスタイルと保護者の期待と可能性」日本体育学会 第56回大会予稿集 p.290
- 11) 前田佳奈 (2006)「子どものマルチスポーツと学校・家庭・社会」日本女子体育大学大学院修士論文
- 12) 前田佳奈, 畑 攻, 小野里真弓 (2006)「子どもスポーツの学校、家庭および社会との連携について」日本体育・

- スポーツ経営学会 第29回大会号 p.37
- 13) 前田佳奈, 畑 攻, 小野里真弓, 他 (2006)「子どもの体力向上実践事業の取り組みとマネジメント」日本体育学会 第57回大会予稿集 p.154
 - 14) Maeda, K., Hata, O., Onozato, M., et al. (2006)「A Study on Management for a Children's Attitude, Behavior and Physical Strength Improvement in an Elementary School.」Asian Association for Sport Management 2006
 - 15) 正木健雄 (2003)「おかしいぞ 子どものからだ」大月書店
 - 16) 水上雅子, 畑 攻, 小野里真弓, 他 (2005)「子どもの体力・運動能力向上と都市型連携システム」日本体育学会 第56回大会予稿集 p.291
 - 17) 文部科学省 (2002)「子どもの体力向上のための総合的な方策について (答申)」中央教育審議会
 - 18) 文部科学省 (2004)「平成15年度体力・運動能力調査報告書」
 - 19) 文部科学省 (2005)「平成16年度体力・運動能力調査報告書」
 - 20) 文部省 (1995)「小学生のスポーツ活動に関する調査研究報告書」
 - 21) 武藤芳照 (1989)「子どものスポーツ」財団法人東京大学出版会
 - 22) 日本学校保健会 (2002)「平成12年度児童生徒の健康状態サーベイランス事業報告書」
 - 23) 佐伯聰夫, 畑 攻, 仲澤 眞 (1998)「地域におけるマルチスポーツクラブの研究」日本スポーツ産業学会平成9年度プロジェクト研究報告書 p. 3-33
 - 24) 佐藤良男, 畑 攻, 齊藤隆志 (2004)「指導者のための体育・スポーツ行政」ぎょうせい p.14-37
 - 25) 四国スポーツ研究会編 (1992)「子どものスポーツ, その光と影-生涯スポーツに向けて-」不昧堂出版
 - 26) 宇土正彦 (1976)「体育管理学入門」大修館書店 p.51-63

(平成18年9月13日受付)
(平成18年12月5日受理)

